

〔東京桑野会〕

東京桑野会総会そして 震災断想・安積群像

東京桑野会副会長

浅川 章

(七十六期)

一 東京桑野会総会

平成二十七年東京桑野会が、五月二十九日東京目白「椿山荘」において会員・来賓など117名が出席して盛大に開催された。来賓として安積桑野会から山口勇会長（69期）・安積高校から鈴木康友教頭・三瓶義元校内幹事（97期）のご出席をいただいた。

総会は、物故会員への黙祷・校歌斉唱に続いて、古川清会長（63期）が、桑野の母校に学んだという共通の経験に結ばれた親睦の会という会の趣旨に言及、会の隆盛・発展のためには若手会員の増加が喫緊の課題であると挨拶した。同日配付された東京桑野会報で、同会長は「本年は終戦七十周年となる。私の安積中二年生の時で、終戦の詔勅で世界が一変してしまった。……あれから七十年、世界は相互依存の時代に入っている。しかし、理想の世界平和が到達し

たかと言えば未だ程遠いと言わざるを得ない。あちこちで銃火が交えられ人命が失われている。そこで私は考えるのだが、もし朝河貫一博士が現在生きていたら、その透徹した歴史観の中で現状を如何に分析し、いかなる警鐘を世に放ったであろうか。……」と述懐する。

次に議事に入り、平成二十六年年度会務報告、同決算報告、同監査報告が了承され、平成二十七年事業計画、同予算が一括審議され、了承された。

総会に引き続き恒例の講演は、本年は文藝春秋社社友 関根徹氏（80期）が「間近に見た作家たち」と題して講演した。氏は永らく文藝春



関根徹氏（80期）

秋社にあつて編集部門を担当した関係上、著名な文士との交渉に携わり、本講演では宮尾登美子・向田邦子・井上ひさし等の大作家を取上げて、企画・執筆依頼・原稿受領を通じて感得した各々の作家の知られざる一面やエピソードを臨場感たつぷりに語り、その場の聴衆には作家の息遣いさえ間近に感じられるほどであった。同席した高松豊氏（74期）の印象記を付す。

「講師は出版社勤務のお役目柄、普段私たちがお会いできそうにない作家たちとの出会いを、その時の状況に見解や解釈を加えることなく「ある日」の風景を語りかけてくれました。『静かに』しかし『確かに聞き取れる声』で、しかも『変わらぬ口調で』……」

あの著名な作家はどのように現れ、なにを語りかけて……人気の女流作家はなにをかイワンや、個々人の才能の豊かさからほとぼる洗練された言葉遣い、交わされる言葉やしぐさのイメージは、ある日の文芸劇場のように思えました。」

第二部の懇親会に入り、来賓の山口勇会長と鈴木康友教頭から、東日本震災による損傷の修復が完了した安積歴史博物館が装いも新たに昨年九月六日にオープンしたこと、母校創立百三十周年記念式典挙行的こと、母校に学ぶ安積



生徒の今春の進学成績、体育・文化部門の活躍等が紹介された。

懇親会は、テーブルごと同期生ごと懇談の輪が拡がり、賑やかに和やかに百十余名の参加者の交流が進み、半ばから年代・期別を越えて酒

を酌み交わし会話が弾み、会は最高潮に達した。そして、小林伸久（84期）、大矢真弘（88期）両氏の司会とリードで首都圏で活躍する若手会員が登壇、自己紹介と抱負表明に満場、激励の拍手が起こり、総員が肩を組み合い、応援歌の合唱の余韻の中にフィナーレとなった。

二 震災断想

未曾有の東日本大震災から四年経った。東日本全体で、死者1万5891人、行方不明者2584人、震災関連死者3194人（15・3・10現在）にのぼる。福島県の震災関連死は1884人で、津波等による直接死（行方不明者含む）の1831人を上回る。

県土の広い地域が放射能によって汚染された福島では、政府による避難指示は今も十市町村に及ぶ。避難者は12万人を数え、うち5万人が今も県外に避難し、避難先は全都道府県に及ぶ。中でも、長引く避難生活から生活基盤が定まらず、将来が見通せないことの不安に直面しているのが、放射線量が年間20ミリシーベルトを超える「居住制限区域」や「帰還困難区域」の住民だ。復興庁の意向調査では、福島第一原発周辺の双葉・大熊・富岡・浪江の各町で、帰還の意向を持っている人は一く二割にとどまる。帰

還をあきらめて他の地域への移住を決めた人が漸増する一方で、その決断をしかねている人も多い。

今年春の福島県民世論調査によると、61%の人がもとのような暮らしができるのは今から「20年より先」と考え、73%の人が放射性物質の影響に「不安」を感じながら暮らしている。

福島復興への道筋が「大いについた」は1%、「ある程度ついた」は27%、道筋が「あまりついていない」は52%、「全くついていない」は17%だった。福島県が昨年行った約2万の避難世帯調査をみると、同居していた家族が散らばって避難している世帯が半数を越え、3カ所以上に散らばっている世帯は県外で12%、県内で17・5%にのぼった。

中東やアフリカなどで戦争や飢饉に伴う難民が後を絶たないが、全国に散り散りになり故郷に帰る展望がもてないこれらの避難者は正に現代の難民と呼ばざるをえず、人間の尊厳が貶められていないだろうか。

福島県の主な産業の復興はどうか。原発事故から四年経ち、農産物や魚介類等から検出される放射性物質は大きく減った。被害から立ち直るを目指す生産者の努力は一定の実を結びつつあるが、なりわいの復興は道半ばだ。水稻の収

穫量は宮城・岩手両県が震災前の10年の水準に戻ったが、作付制限がある福島県は86%にとどまる。農作物等食品中の放射性物質を調べるモニタリング検査は今も全国で続き、国の基準値を超えた検体の割合は大幅に減った。

野菜類は2年連続で基準値超えがゼロ、全袋検査をしている福島県産米も2014年度は初めてゼロとなった。ただし、福島県産青果物の流通価格を震災前と比較すると、他の県産品の平均価格比で、リンゴ・トマトはマイナス10ポイント、キュウリはマイナス5Pまで回復したが、福島を代表する果物のモモはマイナス20P前後の回復にとどまる。

漁業の復興は遅れている。福島県の沿岸漁業者は現在も本格的な操業はしていない。12年夏から放射性物質濃度がきわめて低いと認められた魚種に限って捕り、国の基準より厳しい自主検査をした上で出荷する「試験操業」を続ける。水揚げ量は震災前の3%にとどまるが、対象魚種は15年2月時点で震災前の主力魚種であるマガレイなどが加わり58種まで増え、海域も全県沖に広がった。一部は東京の築地市場など県外にも出荷している。

三 安積群像

三春町在住の僧侶で芥川賞作家の玄侑宗久氏

(56年生まれ)は2013年春、短編小説集『光の山』を出版した。書くことが難しい状況の中で、「震災後の生の全体像を様々な人々の点描を通じて表わしたかった」と語る。

津波で孫と父親をそれぞれ亡くした警察官と幼児との触れ合い。原発事故の放射能と子供への影響の考え方をめぐってすれ違う夫婦――。被災地に暮らす著者ならではのリアルな空気感が6編を覆う。

表題作だけは近未来風の設定の下に、放射能の除染作業等が出た、誰もが置き場に困る土や枯れ葉を自宅の敷地に一手に引き取る老人が描かれる。持ち込み量はどんどん増え、やがて集積物は高さ20メートルの小高い山となった。老人は息子に述懐する(ワシらはホーシヤノーのお陰で最後まで生きがいを持って生きられた。すまんが、……ワシのときはあの山で燃やしてくれんか)老人が亡くなり遺体は小さな山脈の上で茶毘に付される。ふと見ると、その山が薄紫の螢光色を発している。まるで阿弥陀さんが乗ってる雲が目の前に降りたつたみたいじゃった。

「震災と原発事故は、私たちに人生を色濃く見させた面がある。人間の愚かさ。国家とはアラの大きな組織だったことも深く気づかされた」

と語る。

震災後は、『福島に生きる』や『祈りの作法』などを著述し、福島の今を発信しつづけている。福聚寺住職の仕事に加え講演の依頼も多く、「福島の実状を知りたいと頼まれれば、できるだけ応えたい」と各地を訪ねる。

郡山市出身の筋内道彦氏(64年生まれ)は、福島県出身者のバンド「猪苗代湖ズ」の仲間とともに「風とロックLIVE福島キャラバン」という音楽イベントで全国を訪れ、トークやライブをする。キャラバンは広島や長崎・沖縄・神戸など戦争や大きな災害を経験した各地を巡回した。故郷が「フクシマ」と書かれるようになって、「これまで他の地域の人々が苦しんでいたとき、どれだけ真剣に考えたかと自問するようになった」と言い、「立場やポリシーの差を越えているんな人の思いをつなぐ人になりたい」と語る。

大震災から四年、節目以外で震災を扱う番組が減っていく中で、月一回のペースで継続的に放送されているNHK「福島をずっと見ているテレビ(Eテレ土曜深夜0時)」が異彩を放っている。福島県在住者や県外に避難している同県出身者に密着取材し、その人が今何を考えているのかを話してもらおうという番組。原発問題

に揺れる農家、あえて除染という仕事を希望した市役所の新人職員——、福島第一原発で働く下請け作業員と東京電力双方に取材するなど硬派な作りの回もある。この番組の進行役を務めるのが箭内氏だ。

放送を続ける中で「つらいこともあった」と言う。それでも番組を続けようと思うのは、「いろいろな人の話を聞いているうちに『今の福島に必要なもの』がどんどん出てきて終わらないからだ」と。「今起きている問題や日本中の人がこれから何をすべきかを福島の人に教えてもらいに行く番組になっている」と淡々と語る。

あの日、福島出身・東京在住の小説家 古川日出男（66年生まれ）は取材中の京都に居た。

東京に戻ることにさえすぐには叶わず、その後もなかなか明らかにならない事態と、次第に露わになってくる事実の凄まじさに戦きながら、おのれの小説家としてのあり方や小説とは何かということについて根本から考え直し始める。そして、1ヶ月後、故郷の地に立った小説家は眼前に広がる光景に震撼させられながらも、それを丸ごと引き受けどうにかして何かを掴み取ろうとする。古川日出男の『馬たちよ、それでも光は無垢で』は、以上のような経緯を綴った作

品である。

古川日出男氏は、三島由紀夫賞「LOVE」や東北を題材にした『聖家族』等の作品で知られる。

東日本大震災を経て、それぞれの現実を「自分の言葉」で社会に発信できるようにと古川氏が学校長となり始めた「ただようまなびや 文学の学校」が15年も11月に郡山市で開校される。プロジェクトがスタートしたのは13年、古川氏が高校の同窓生らに声をかけスタッフを集めた。講師には同じく同窓生で音楽家の大友良英氏、同県出身の社会学者開沼博氏らが参加した。

14年には、「言葉でできること」をテーマにワークショップ、座談会等29コマの授業が用意された。作家・詩人・学者・音楽家・写真家等多彩な講師陣と高校生・大学生・社会人等200人を超える受講者が膝を交えて語り合い、それぞれ言葉の可能性を再認識するとともに自身のあり方をみつめた。

この試みは福島を孤立させず、人々の悲しみに共感し人々を息長く励ますに違いない。

○ 陽はまた昇る

国土の損壊という点で、また多くの国民を巻き込んだ惨禍という点で日本の近現代史上2011・3・11は1945・8・15と並んで特別

な意味を有する日となった。

かつて幕末戊辰戦争があり、福島県内の広い地域が戦場になり多くの死者が出た。会津藩を柱に奥羽越列藩は賊軍とされて、新しい明治の時代が始まった。だが過酷な環境の中から福島県は野口英世・朝河貫一らの多くの人材を輩出した。

福島県では今、困難な状況を乗り越え復興を実現する鍵は人材育成にありとの考えのもと、県民そろって子供たちに期待をかけ、その芽を伸ばそうとしている。

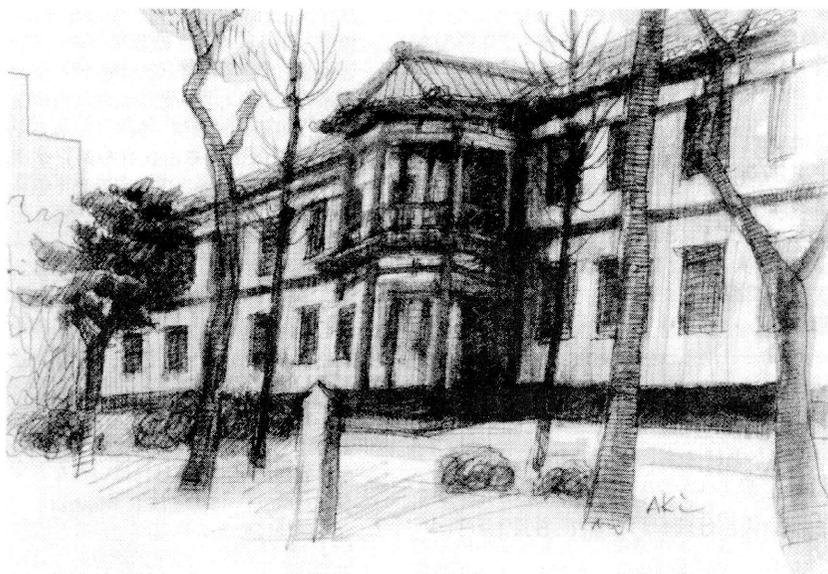
15年4月、広野町に県立ふたば未来学園高校が開校した。一期生は県内外から152人、アカデミック・トップアスリート・スペシャリスト三系列の科目群を備える。人類史に残る災害事故を乗り越え、グローバルな視点から福島県のみならず日本の復興を担い、広く社会に貢献する人材の育成を教育目標とする。なお、校歌は「ふたばの教育復興応援団」の秋元康（作詞家）がプロデュース、作詞は谷川俊太郎、作曲は安積OBの箭内道彦。

陽はまた昇るように福島から再び新しい日本を創る有為の人材が育つことを期待し、また確信している。

■安積中学校■安積高等学校在京同窓生

東京桑野会会報

●2015年4月1日発行●発行・編集人 古川清●発行所 東京桑野会事務局 〒101-0045 東京都千代田区神田鍛冶町3-2 サンミビル7階 新神田法律事務所内



No.37

《安積歴史博物館（旧本館）》
画 秋山忠也（71期）



ご挨拶

東京桑野会会長
古川 清

- ①桑野の母校に学んだという共通の経験に結ばれた同窓の親睦の会であること
- ②会員はみんな仲良く相親しみ楽しい会であること
- ③何らかの意味で会員の頼りになるような面もある会であること

本年は終戦70周年となる。私の安中一年生の時で終戦の詔勅で世界が変ってしまった。エリート集団だった帝国陸海軍はあっと言う間に雲散霧消し、ひと月も経たぬ中に米兵が進駐して来た。皆体格が良く血色も良く道端に座り込んで大きな袋から取り出して我々にくれたチューインガムの何とおいしかったことか。

あれから70年、多くの国が独立を達成、政策よろしきを得て貧困から脱却した国も数多くある。国際貿易も飛躍的に増大し、世界は相互依存の時代に入っている。

しかし、理想の世界平和が到達したかと言えば未だ

程遠いと言わざるを得ない。あちこちで銃火が交えられ人命が失われている。更に新しいタイプの殺し屋、国際テロリストがオタワやワシントンに出没して市民を恐怖に陥れる事態も発生している。

そこで私は考えるのだが、もし朝河貫一博士が現在生きていたら、その透徹した歴史観の中で現状を如何に分析し、如何なる警鐘を世に放ったであろうか。私に明確な結論はない。しかし、彼ならこのままでは世界は破滅に向かうとして「世界の禍機」なる著作を出したに違いないと思う。会員諸兄、友人達と酒を飲み交わす時この点を討論されては如何であろうか。